

王逸『楚辭章句』全卷における「離騷」テーマの展開

The Development of Lisao Theme in WangYi's *Chuci Zhangju*

田 宮 昌 子

本稿は屈原イメージの変遷を追いながら、中国文化史における系譜性の問題に取り組もうとする研究の一環である。本稿では、後漢・王逸『楚辭章句』にその後の屈原イメージの祖型を探る。イメージを考察するに当たっての具体的手法としては、屈原という人物及び屈原作“とされた”楚辞について語る語彙を屈原イメージの媒体として扱う。意識やイメージという数値化しがたい抽象的な対象を考察するために、本研究は漢文化の最も重要な媒体である“漢字”を切り口にキーワードを電子文献上で検索し、使用頻度を考察するという方法を試みる。この手法はまた文化史上の系譜性を扱うという従来は非常に困難であった課題に取り組むことを可能にしてくれる一方法であると考えられる。

キーワード：王逸『楚辭章句』、屈原イメージ、祖型、「離騷」テーマ、検索字群

目 次

はじめに

一、『楚辭章句』の基本的性質と本稿の基本姿勢

二、「離騷」テーマ

三、『楚辭章句』における「離騷」テーマの展開

むすびに

参考文献

凡 例

- 1、表中の「出例」「頻度」は、それぞれ本文で説明する「該当出例」「出例頻度」に当たる。
- 3、[]は中国語原文を示す。
- 4、「九歌」など、複数の篇で構成される篇については「九歌・山鬼」のように表記する。
- 5、『楚辭章句』原文は繁体字を用いる。

はじめに

本稿は筆者が「悲憤慷慨の系譜」と名づける研究の一環である。「悲憤慷慨」の情は、有史以来様々な形式の「文」の中に書き留められており、長い時間的経緯の中でそれを以って記される事例を蓄積しつつ系譜化してきた。この系譜上には「悲憤慷慨」の意境を象徴するいくつもの形象が現れたが、屈原の伝承は前漢には既に成立しており、以来現代まで基本的に絶えることなく行われてきた。屈原は中国文化史の一側面における“変遷の中の継承”を見るに当たって有効且つユニークな切り口たりえると思われる。

イメージを考察するに当たっての具体的手法としては、屈原という人物、屈原作“とされた”楚辞（以下、屈賦¹⁾）および関連する辞賦について語る語彙を屈原イメージの媒体として扱う。近年急速に進んだ古典文献の電子文書化によって、このような文化史的な関心を扱うことが可能となって来た。技術的課題もあるが（後述）、従来のミクロな視点では見えなかったものが見えてくることが期待でき、また問題点の洗い出しと解決のためにも敢えて実践を試みるものである。

一、王逸『楚辭章句』について

王逸『楚辭章句』は、戦国末から後漢に至る楚辞及び屈原理解の集大成であり、先行する注釈書が亡んだため、後世に伝わったものとしては最古の楚辞注釈書である。また、楚辞学の基礎が形成された漢代の楚辞注釈本としても唯一の伝本である。これらのことから、楚辞学において後世の如何なる研究も取って代ることの出来ない特別な位置を占め続けて来た。また屈原の形象形成においても、『史記』「屈原傳」と共に屈原に関する最古の情報源として、屈原像の祖型を後世に提示する作用を果たし続けて来た。本稿は後者の位置付けから王逸『楚辭章句』を取り上げる。

王逸『楚辭章句』は、後漢元初年間（114～119年）に成立したと考えられ²⁾、宋代に刊版が盛んになるまで約八百年間の手写を経ている。刊本としては最も早期になる宋版は今に伝わらず、現存する善本は明代に宋版を翻刻したものである。このような状況からテキストとしては多くの問題が指摘されている。筆者は別稿において、指摘されている問題点と議論をまとめた上で、主題の考察に当たって筆者が取る立場を述べた。以下に本稿の議論を進めるに当たっての基本方針を簡潔に述べて確認とする。詳細は参考文献⑥を参照。

1) 賦の作者について：

基本的に『楚辭章句』においてどのように扱われているかに依る。屈原作とみなされている巻一～七までを「『楚辭章句』において屈原作とみなされている」という意味で「屈賦」と呼称する³⁾。

2) 注の作者について

王逸の楚辞学は先行する楚辞学の集大成であり、王逸『楚辭章句』注とは、王逸が先行する解釈を受容した上で取捨選択や自身の見解を加えたものであることは大方の認めるところである。そ

の中で王逸作である巻十七「九思」注文についても王逸によるとする説もあるが、否定的見解は少なくない。本稿では『楚辭章句』全書の注文を総称する時には『楚辭章句』注と呼び、王注とは呼称しない。詳細は参考文献⑥参照。

3) 長い伝承の間にテキストに生じる問題について

長い手写、版刻の繰り返しのうちに生じる異同、具体的には誤写、省略、後世の加筆と王注との混同などによって、現行本は王注の原形とは異なっている可能性が指摘されている⁴⁾。この問題については、作業のもととなる版本を明示することで対処する。検索作業を『文淵閣四庫全書電子版』で行ったため、字句の異同については、基本的には『文淵閣四庫全書』に依拠する。一部の異同については、参考文献①に抛り変更する。議論の中身と判断の根拠について詳細は参考文献⑥参照。

4) 巻十七「九思」について

「九思」が『楚辭章句』原本に含まれていたかどうかは定かでなく、仮に含まれていたとしても、序や注は付されていなかった可能性がある。このため、本稿では「九思」篇において「離騷」テーマがどういう傾向をみせるのかという関心から、「離騷」テーマ語彙の検索や該当例の選別は他の諸篇と同じように行い作表するが、『章句』注文における屈原イメージを考察するに当たっては、「九思」の出例は加えない。議論の中身と判断の根拠について詳細は参考文献⑥参照。

二、「離騷」テーマ

1. 「離騷」の特別な地位

屈原イメージに占める「離騷」篇の特別な地位を示す二つの現象がある。まず、前漢司馬遷『史記』「屈原傳」は現存する最古の屈原伝であるが、文中には「離騷」「天問」「招魂」「哀郢」「懷沙」「漁父」篇が言及あるいは引用されており、『史記』「屈原傳」における屈原の人格や境遇の叙述は当時の「離騷」を中心とした屈賦および関連する楚辞作品についての理解に基づいていることが分かる。更に、その叙述をみれば、屈原は「離騷」篇の作者というより、主人公であるかのごとくである。詳細は、参考文献④参照。

次に、王逸の「離騷」後序によれば、劉安・賈逵・班固のそれぞれに『離騷經章句』があった（いずれも佚書）が、賈逵や班固が注をつけたのは屈賦25篇のうち「離騷」篇のみであった。班固の『離騷經章句』序⁵⁾は、劉安のものを「經」の字をつけずに『離騷傳』と呼んでおり、伝わっている書名は一定ではないため、これらの著述全てに当初から「經」の字が有ったかどうかは定かではないが、洪興祖『楚辭補注』の記述から、王逸『楚辭章句』には「離騷」篇を「離騷經」とし、続く諸篇の篇名には「傳」字を付す版があったことが知られている⁶⁾。そこから、『楚辭章句』は「離騷」を經とし、他篇をその「離騷」の經義を説く伝とする經学的意図のもとに編纂されたものとみる説もある⁷⁾。

このように、屈原作として伝わっていた辞賦の中でも「離騷」は特に重視されて来た。屈原は何よりも「離騷」篇の作者として後世に認知されており、「離騷」無くして屈原の伝承が今日まで行なわれることは無かったであろう。更に、後世の屈原への言及の多くが屈原を「離騷」の作者としてというより「離騷」の意味世界の主人公として捉えており、屈原イメージの核心には「離騷」がある。詳細は参考文献⑤参照。

2. 「離騷」テーマ析出作業：

そこで、屈原像の核心を成す「離騷」を王逸がどう読んだかを検討した。作業は以下五段階を辿った。

- ① 「離騷」王注を読み込む：この作業を経て、正反相対立する価値と両者の葛藤、双方の価値を象徴する人名・抽象概念・特徴的文型（被害を表す受身形など）等を分類、そこから幾つかのテーマが浮上した。
- ② 「単純出例」を出す：これら諸テーマを展開する特徴的語彙を「離騷」本文と王注それぞれで検索し、全ての出例を拾い出した。
- ③ 「該当出例」を出す：「単純出例」を1件ずつ検討し、テーマ以外での出例を除外する選別作業を経て、「離騷」テーマに該当する「該当出例」を得た。
- ④ テーマ整理：この過程で検索字群の絞込みも行った。例えば、「清潔」テーマでは、政治倫理上の「きよさ」「潔癖さ」をめぐる王注の叙述から拾い出した語彙グループ〔清〕〔潔〕〔白〕〔明〕〔浄〕〔香〕で検索を行ったが、最終的には〔清〕〔潔〕二字に絞り、テーマ名を「清潔」とした。最終的に各テーマの検索字群は次章において順次示す通りとなった。
- ⑤ 「出例頻度」：最後に、各篇の総字数を母数として該当出例の「出例頻度」を出した。各篇の長短が異なるため、出例数だけでは意味を成さないためである。

以上の「離騷」テーマ析出作業について、詳しくは参考文献⑤参照。

三、『楚辭章句』における「離騷」テーマの展開

本章では、これら「離騷」諸テーマを順次解説した上で、『楚辭章句』において当該テーマがどのような展開をみせるかを見ていく。論文中に〔 〕で示すのは、検索字群及び原文として取り上げる場合である。

1. メインテーマ：「登用」 検索字群：（用）（進）（事）（位）（去）（君）（臣）

「離騷」「前序」は、屈原が「離騷」を制作した動機を「君の覺悟して正道に反り、己れを還すを冀ふ也」とする。「離騷」は、君が非を悟り自分を召し戻すことを願うものだというのである。以下に示すように「離騷」注文には、忠臣の君への訴えとして「離騷」を読む姿勢が顕著である。その

資料1 メインテーマ「登用」出例頻度（正文）

	文字数	登用												平均		
		出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度			
卷一離騷	2492	2	0.08	3	0.12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.03
卷二九歌	1564	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
卷三天問	1570	0	0	0	0	0	0	1	0.06	0	0	0	0	1	0.06	0.02
卷四九章	4108	1	0.02	3	0.07	2	0.05	0	0	4	0.10	19	0.46	6	0.15	0.12
卷五遠遊	1142	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
卷六卜居	321	0	0	0	0	1	0.31	0	0	0	0	0	0	0	0	0.04
卷七漁父	211	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
卷八九辯	1749	0	0	3	0.17	0	0	0	0	2	0.11	10	0.57	0	0	0.12
卷九招魂	1214	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
卷十大招	888	0	0	0	0	0	0	1	0.11	0	0	0	0	0	0	0.02
卷十一惜誓	505	1	0.20	1	0.20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.06
卷十二招隱士	195	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
卷十三七諫	2656	1	0.04	5	0.19	0	0	0	0	2	0.08	8	0.30	4	0.15	0.11
卷十四哀時命	1072	2	0.19	1	0.09	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.04
卷十五九懷	1410	1	0.07	0	0	0	0	0	0	2	0.14	4	0.28	0	0	0.07
卷十六九歎	3803	0	0	2	0.05	0	0	0	0	4	0.11	1	0.03	0	0	0.03
卷十七九思	2103	2	0.10	1	0.05	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.02
平均			0.04		0.06		0.02		0.01		0.03		0.10		0.02	0.04

中では、人君が賢臣忠臣を登用すること、その結果として賢人が〔位〕を得ることが関心の中心となっており、「登用」が王注「離騷」世界のメインテーマとして浮上する。

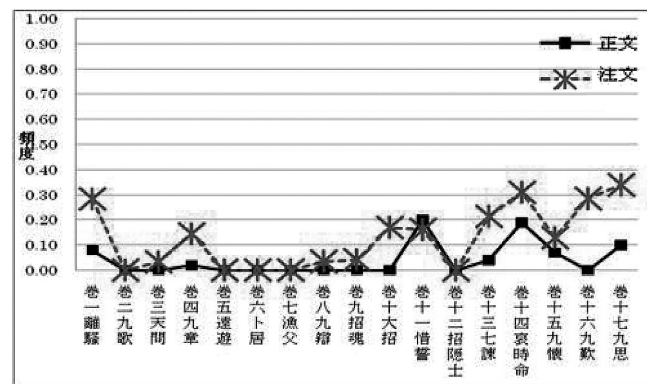
まず、全体傾向を見ると、正文においては出例頻度は全体的に低く、平均は0.04%である（資料1）。出例がない場合に網かけを施しているが、検索字の出例が全くない篇も5篇あった。「九歌」「遠遊」「漁父」「招魂」「招隱士」である。その中で「九章」正文において全面的に「登用」テーマが展開するのが注目される。

次に注文を見ると、出例状況は大きく異なる。「漁父」が依然として1字の出例もない以外は、各篇において「離騷」テーマが展開され、平均0.15%と、正文の約4倍となる（資料2）。平均出例頻度上位3位は「離騷」0.25%「九章」0.25%「惜誓」0.25%「七諫」0.31%「九歎」0.22%の5篇である（2位が3篇）。

資料2 メインテーマ「登用」出例頻度 (注文)

	文字数	登用														平均
		出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	出例	頻度	
卷一離騷	10212	29	0.28	8	0.08	12	0.12	5	0.05	23	0.23	76	0.74	26	0.25	0.25
卷二九歌	5969	0	0.00	1	0.02	2	0.03	3	0.05	5	0.08	16	0.27	3	0.05	0.07
卷三天問	5954	2	0.03	0	0.00	4	0.07	3	0.05	0	0.00	11	0.18	4	0.07	0.06
卷四九章	9658	14	0.14	4	0.04	16	0.17	8	0.08	12	0.12	94	0.97	18	0.19	0.25
卷五遠遊	2054	0	0.00	1	0.05	0	0.00	1	0.05	1	0.05	2	0.10	0	0.00	0.03
卷六卜居	291	0	0.00	1	0.34	1	0.34	0	0.00	0	0.00	1	0.34	0	0.00	0.15
卷七漁父	162	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0.00
卷八九辯	2847	1	0.04	4	0.14	0	0.00	5	0.18	4	0.14	20	0.70	6	0.21	0.20
卷九招魂	4841	2	0.04	0	0.00	2	0.04	0	0.00	1	0.02	7	0.14	1	0.02	0.04
卷十大招	3534	6	0.17	7	0.20	0	0.00	2	0.06	0	0.00	4	0.11	2	0.06	0.08
卷十一惜誓	1242	2	0.16	1	0.08	0	0.00	2	0.16	2	0.16	11	0.89	4	0.32	0.25
卷十二招隱士	421	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	0.24	1	0.24	0	0.00	0.07
卷十三七諫	6075	13	0.21	9	0.15	1	0.02	9	0.15	9	0.15	67	1.10	23	0.38	0.31
卷十四哀時命	2260	7	0.31	3	0.13	1	0.04	1	0.04	2	0.09	9	0.40	1	0.04	0.15
卷十五九懷	2324	3	0.13	2	0.09	0	0.00	0	0.00	7	0.30	7	0.30	2	0.09	0.13
卷十六九歎	10508	30	0.29	16	0.15	4	0.04	4	0.04	23	0.22	70	0.67	17	0.16	0.22
卷十七九思	2651	9	0.34	1	0.04	1	0.04	4	0.15	7	0.26	22	0.83	6	0.23	0.27
平均			0.13		0.09		0.05		0.06		0.12		0.47		0.12	0.15

資料3 メインテーマ「登用」出例頻度：検索字 (用)



次に、[用] 字を例に、メインテーマ検索字の『楚辭章句』における出例状況をみる (資料3)。□付きの実線が正文、米印付きの点線が注文を示す (以下同じ)。

上記の検索字の出例を分析して、以下5つのサブテーマを得た。

1) 「よき登用」「あしき登用」

桀紂は愚惑にして天道に違背し、施行惶遽なり。…故に身は陷阱に觸れ、滅亡に至る。法を以て君を戒むる也 (『離騷』「何桀紂之昌被兮夫唯捷徑以窘步」注文)

「離騷」注文では、正文中の君名臣名が「登用」を中心に読まれ、堯舜となるか桀紂となるか、人君の位にある者の成敗を決するものとして、「賢を擧げ能を任ず」を繰り返し説く。こうして、人君の徳の具現として、「よき登用」—賢人を登用すること—が説かれ、「よき登用」を勧め「あしき登用」を諫める。以下に『章句』における展開を具体的に見ていく。

堯舜の聖明の徳有る所以は、賢能を任じ、百姓を慈愛するを以て、故に民今に至るも之を稱ふ (『七諫・沈江』「堯舜聖而慈仁兮後世稱而弗忘」注文)

正文の「慈仁」が「賢能を任じ、百姓を慈愛す」と注される。「慈仁」の内容としては、「慈愛百姓」だけでも十分であろうが、「よき登用」が補われる。一方、「あしき登用」は君位を脅かし、亡国をもたらす。

古より迷亂の君、紂・夫差が若き有り、忠信を用ひずして、國を滅し身を亡す (『九章・涉江』「吾又何怨乎今之人」注文)

賢人を「登用」することは人君の徳の現れであること、「登用」のよしあしが君位の安泰を左右すること、こうして君への戒めの形で賢人の「登用」を説くこと、これが「登用」をめぐる注の基調となっている。

ところで、楚辭の中でも「大招」の注文は、他篇と大きく状況が異なる。現実 (注文はこれを楚國の描写とする) を良いとして魂を招くので、「離騷」テーマでは基本的に否定形で登場するはずの「よき登用」のあり方が肯定形で目白押しとなる。「賢士を尚び進む」「仁義の行ひを進め用ひ、苛刻暴虐の人を禁絶す」「先づ傑俊の士を升用し、徳無く階次に由らざるの人を壓抑して、非惡罷驚は誅して之を去る」「士を擧ぐるには上は夏殷周に法り、衆聖並び進み、遺失有る無し」。ここに「離騷」テーマが理想とする登用を見ることが出来る。

次の出例のように、注者および読者は屈原に自己同一化して、「よき登用」が行われることを願う。屈原が「登用」を願う動機として語られるのは、士の理想である「安民」の実現である。その実現の唯一の方途は、賢君に見出されて、その臣下となることである。ここから「登用」の願いが説明され、次のテーマに繋がっていく。

屈原…乃ち仁賢の鸞鳳が若き人をして、困りて貞女の洛水の神が如きを迎へしめ、己れを聖君の徳は黄帝・帝堯が若き者に達せしめ、與に徳を建て、化を成し、禮を制し、樂を作り、以て黎庶を安ぜんを欲する也 (『遠遊』「張樂咸池奏承雲兮」注文)

2) 臣としての賢人 検索字群：〔君〕〔臣〕

衆女は衆臣を謂ふ也。女は陰也。專擅無きの義なり。猶ほ君の動きて臣の随ふがごとき也。故に以て臣に喩ふる也（「離騷」「衆女嫉余之蛾眉兮」注文）

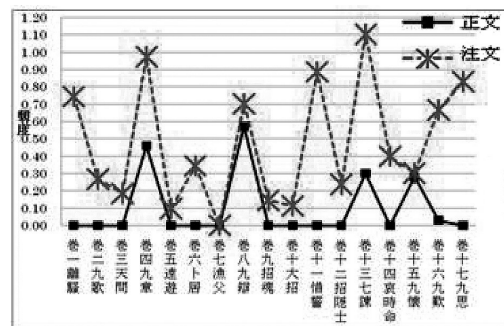
正文中に詠まれる様々な事象を注文は君臣関係に解する。そこに注者の「登用」への強い関心、君臣関係の規定のありようを見ることが出来る。上に挙げた出例に典型的に見られるように、注文における君臣関係への言及では、君は能動、臣は受動である。ここから自ずと陰陽への対応も定まる。「九章・涉江」「陰陽易位時不當兮」の注は「陰は臣也、陽は君也」である。万物の根源である陰陽への対応が定めれば、男女を始め、注者が主従関係を見出す全ての事象に君臣関係を当てることが可能となる⁹。

このように、君臣という上下関係における臣「下」としての立場が、王注のメインテーマを「登用」とする基盤であることが分かる。注文に現れる賢人の位置付けは、賢君あつてのものである。「賢臣も明君に遇はざれば、則ち亦た其の智能を施す所無し」（「九章・懷沙」注文）、いかなる賢人といえども、賢君に見出され、臣下として「登用」されて〔位〕にあるのでなければ、理想を実現することは出来ないのである¹⁰。

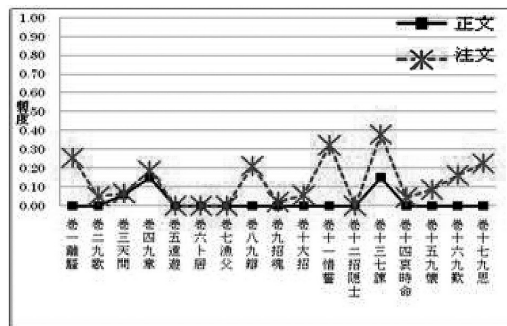
己れ口を閉じ、舌を結びて、復た言はざらんと欲すれども、嘗て君の厚禄を被るを以て、故に黙すること能はず（「七諫・謬諫」「欲闔口而無言兮嘗被君之厚徳」注文）

楚辭各篇には君命や君の寵愛を望む表現が多いが、この「七諫」の例では正文の「厚徳」を「厚禄」と注す。この意識は次項の〔在位〕に繋がっていく。

資料4 メインテーマ「登用」出例頻度：検索字〔君〕



資料5 メインテーマ「登用」出例頻度：検索字〔臣〕



資料4、5は、検索字群〔君〕〔臣〕の出例状況である。まず、〔君〕は正文では17巻中12巻に全く出例が無いが、平均0.10%あり、正文としては比較的高い。これは、出例がある5巻の出例頻度が非常に高いため、例えば上位3巻は「九章」0.46%、「九辯」0.57%、「七諫」0.30%となっている。注文になると、「漁父」で依然として出例が無い以外は全ての篇に出例があり、平均で0.47%、正文の5倍となる。出例のある16巻のうち上位3巻は「九章」0.97%、「惜誓」0.89%、

「七諫」1.10%である。

〔臣〕は正文中では17巻のうち14巻と8割で出例皆無である。出例があるのは3巻のみで、「天問」0.06%、「九章」0.15%、「七諫」0.15%である。注文になると、出例なしは「遠遊」「卜居」「漁父」「招隱士」の4巻に減少し、平均は0.12%、正文の6倍である。出例がある13巻のうち上位3巻は「離騷」0.25%、「惜誓」0.32%、「七諫」0.38%である。

3) 在位 検索字群：〔位〕

在位の臣、心は皆貪婪にして、内に其志を以て他人を恕度す。己と同じからざれば、則ち各嫉妬の心を生じ、清潔を推棄して、用ひらるるを得ざらしむ（「離騷」「各興心而嫉妬」注文）

注文は、臣下として登用されている状態を〔在位〕と表現する。「離騷」正文には〔位〕の出例はなく、注者の「登用」の関心がどこにあるかを示すものといえる。〔位〕は、後に見る「忠佞の対立」における究極の争点である。〔忠〕は「登用」をめぐる敗れた側であり、「離騷」注文では、〔在位之臣〕〔在位之人〕は〔忠賢〕と対立する〔讒佞〕の代名詞にさえなっている。

注文の〔位〕への言及からは、賢人が理想を実現するために「登用」を願うこと、その「登用」は〔位〕を意味するという、「登用」に際しての〔位〕へのこだわりをみることが出来る。「君子も爵位に居らざれば、衆は亦た其の賢能を知る莫し」（「九章・懷沙」注文）「賢知を持するの士も、山谷に居らば、則ち衆愚は以て不賢と為す」（同上）。〔位〕を失う、得られないということが意味する状態とそれへの〔衆〕の反応が〔位〕へのこだわりを引き起こす。そして、次節でみるように、〔位〕に就いているのは、やはり〔讒佞〕の側であり、〔忠賢〕は敗者である。

既にみたように、「大招」注文では理想の「登用」をみることが出来る。その場合、〔位〕に就いているべきは忠賢であるが、現実に位にあるのは、〔小人〕〔讒佞〕である。次の出例で述べられる小人の行いは後にみる〔讒佞〕そのものである。

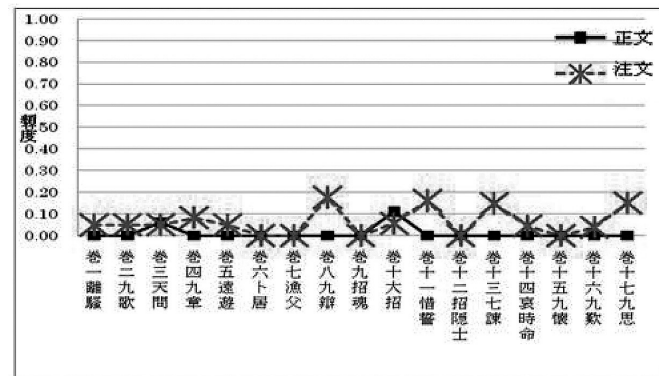
小人の位に在るや、其の愚心を以て、先聖の法度を改更し、仁義に背違し、相ひ與に耳語して、利を謀りて虚偽を忘造¹¹し、以て賢人を譖毀す（「七諫・怨世」「改前聖之法度兮喜囁嚅而妄作」注文）

また、ある出例では、正文の「身の卑賤を顧みず」忠を尽くそうとする願いに注して、「敢へて身の貧賤を顧念せず、高位を慕はんと欲す」と正文には直接は現れない「高位」が補われる¹²。「在位」や「登用」をめぐる表現を注文から拾ってみると、「賢者も廟朝に居らざれば、則ち俗人の侵害する所と為る」（「惜誓」）「賢者も身に爵禄無くば、俗人の困侮する所と為る」（同上）「虚偽の人は進用せられて位に在り、顯職に當る」（「七諫」「沈江」）「賢を選び士を任じ、官は其の人を得て、法令は修理す。故に幽隱の士、皆な嘉名有り」（「七諫」「沈江」）。そこに登場する〔廟朝〕〔爵禄〕〔職〕〔官〕〔名〕…という語彙からは、「登用」の願いが、士人の官場における成功をめぐる世俗的願望の面を強く持っていることが分かる。

次の出例にみるような〔位〕をめぐる対立は、次節でみる二つの相対立する政治倫理—忠佞の対立—に重なっていく。

臣の君非を承け順ふは…苟くも自ら容れ入り、以て高位を得。直言諤諤、君非を諫め正す有らば、反って之を放棄す（「惜誓」「或推逐而苟容兮或直言之諤諤」注文）

資料6 メインテーマ「登用」出例頻度：検索字〔位〕



検索字〔位〕の出例状況（資料6）をみると、正文では、17巻中15巻と9割で出例がなく、平均は0.01%である。出例があるのはわずか2巻、＜天問＞0.06%＜大招＞0.11%である。注文になると、出例がないのは5巻で、平均は0.06%、正文の6倍である。出例がある12巻のうち上位3巻は「九辯」0.18%「惜誓」0.16%「七諫」「九思」0.15%で、漢賦が中心である。

4) 敗者としての賢人

我外には芬芳の徳有り、内には玉澤の質有るも…施用せらるるを得ず…用ひられざれば則ち獨り其の身を善くする也（「離騷」「唯昭質其猶未虧」注文）。

屈原、或いはそれに同化して「離騷」を読む「己れ」は、「登用」のテーマにおいて敗者の側にある。すでに〔位〕において見たように、現実に登用されているのは讒佞の側である。「己れ」は「登用」において敗者であり、そうであることが〔忠賢〕の証左のようにになっている。このため、登用の語彙は圧倒的に否定形で出例し、更に〔不見～〕（～されず）など受身表現を取ることが多い。この受動性にも賢人の臣下としての側面をみることが出来る。

己れ重ねて傷み、是に於いて歎息自恨する所以は、道を懐きて施用せらるるを得ざる也

（「九章・懷沙」「曾傷爰哀永歎喟兮」注文）

己れ忠信の徳を懐き、芳香の志を執りて、中野を遠行し、散じて之を棄つるは、用ひられざるを傷む也

（「九懷・逢紛」「懷蘭蕙與蘅芷兮行中壘而散之」注文）

屈賦や楚辭の注文においても、否定形と受身形の多出に変化は見られない。「己れ」は「登用」において敗者の側にあり、そうであることが〔忠賢〕の証左となっている。そして、その結果として「去」という選択肢が浮上する。

5) 去一国を去る、君を去る

我忠信の情を懐くも、發用せらるるを得ず。安んぞ能く久しく此の闇亂の君と終古にして居らんや。意ふに復た去らんと欲する也（「離騷」「懷朕情而不發兮余焉能忍與此終古」注文）

賢人がその理想を世に行うためには、己れを認め用いてくれる君を得なければならない。君が賢君でなく、国に道が行われない時、賢人はその国を去って、天下に賢君を求めるべきである。それが古の賢人のとるべき「出処進退」の道であった。

「離騷」王注における〔去〕は、上に示す出例のように、仕えるべき君を選ぶという、言うなれば積極的〔去〕である。巻二以降においても、「人臣一たび去らば、君も亦復た拘留するを得ず」（「九歎・靈懷」）「君に徳有らば則ち至り、徳無ければ則ち去る」（「九歎・愍命」）のように、この種類の〔去〕はみられる。

しかし、一方で次の出例のように、君に退けられることを〔去〕と表現する、言わば消極的〔去〕が現れる。そして、その〔去〕を悲しむ。

己れ放逐されて我が郢都の故閭を去りて、湘沅の水を回りて、遠く移徙し、其の之く所を失ふ

（「九歎・思古」「回湘沅而遠遷」注文）

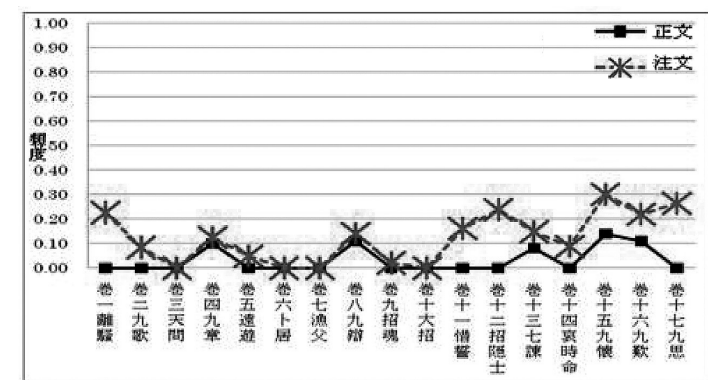
屈賦以降の『章句』収録作における新たな展開としては、賢君を求めて暗君を去るというよりも、俗を去るという意味合いでの〔去〕、道家的「出世」に近い〔去〕、更には遠遊の雰囲気を持つ〔去〕が現れる点である。以下にこの順で出例を挙げる。

己れ衆人の皆な苟且を行ふを患苦し、故に風に乗りて遠く去る（「七諫・自悲」「苦衆人之皆然兮乘回風而遠遊」注文）

屈原、朝堂に背き去り、草澤に隠伏して、其の所を失ふ（「招魂」「涉江采菱發揚荷些」注文）

自ら用ひられざるを知る。願くは世を避けて遠く去り、崑崙山に上り、懸圃に遊び…以て壽を延ばさん（「哀時命」「願至崑崙之懸圃兮采鍾山之玉英」注文）

資料7 メインテーマ「登用」出例頻度：検索字〔去〕



検索字〔去〕の出例状況(資料7)をみると、正文では、17巻中12巻と7割で出例がなく、平均は0.03%である。この中で出例があるのは「九章」「九辯」「七諫」「九懷」「九歎」と屈賦以降の作が中心である。注文になると、出例が無いのは「天問」「卜居」「漁父」「大招」の4巻に減少し、出例頻度は平均0.12%となる。出例がある13巻中7巻と、出例は漢賦が中心である。

2. 派生テーマ：「登用」をめぐる葛藤

メインテーマからは、また幾つかの派生テーマが生じているが、主要な5テーマを取り上げて見ていく。

1) 忠佞の対立

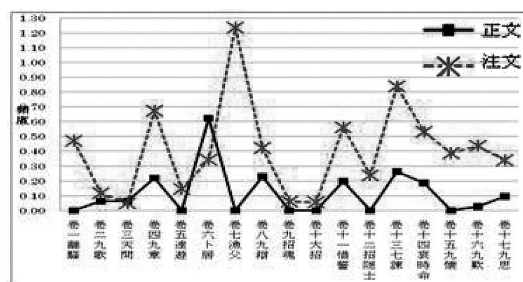
「登用」をめぐるのは、君の信任とそれによって得られる〔位〕をめぐる臣臣間に対立・葛藤が発生する。王注は「離騷」正文中の植物や鳥獸などの表現をこの「登用」をめぐるの臣臣間の対立の象徴として読む。

検索字群：〔忠〕〔賢〕

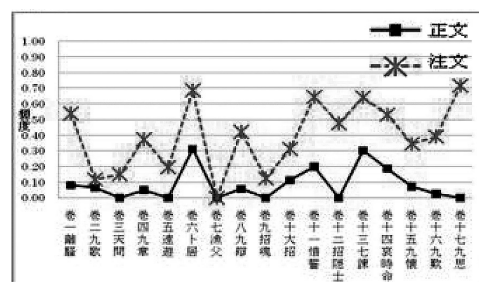
我忠信譽譽たるは、乃ち上は前世の遠賢に法る(「離騷」「譽吾法夫前修兮非世俗之所服」注文)

この出例には、「離騷」テーマにおける〔忠〕と〔賢〕の意味関係が典型的に表れている。「離騷」注文において〔忠〕が形成する熟語は、出例数の多い順に〔忠信〕〔忠直〕〔忠正〕〔忠貞〕〔忠誠〕。ここから忠賢の側の徳の中身を見ることが出来る。一方、〔賢〕は〔賢〕一字の出例が最も多い。その場合、〔害賢〕〔求賢〕〔挙賢〕…というように、目的語になっている例が殆どを占める。この場合の〔賢〕は、〔賢人〕〔賢士〕〔賢臣〕…など王注に登場する〔賢〕なる人々を指す語彙に相当すると見てよいだろう。こうしてみると、これらの〔賢〕なる人々が備える徳を示すのが、〔忠〕が形成する語彙であるといえる。

資料8 派生テーマ出例頻度：検索字〔忠〕



資料9 派生テーマ出例頻度：検索字〔賢〕



〔忠〕〔賢〕の2字は正文中にも広く現れる。これは他の検索字にはみられない現象である。注文になると、「漁父」篇に〔賢〕字の出例が依然として無い以外は、全ての篇に出例する。〔忠〕〔賢〕2字の平均出例頻度は正文の4倍あるが、グラフが示すように、正文と注文との間には明らかな開

連がある。

具体的に〔忠〕字の出例状況(資料8)をみると、正文では17巻中10巻と6割近くに広く薄く出例する。平均0.12%である。上位3巻は「卜居」0.62%「九辯」0.23%「七諫」0.26%である。注文になると、全ての篇に出例があり、平均は0.41%、正文の約4倍となる。上位3巻は「漁父」1.23%「九章」0.67%「七諫」0.84%である。

具体的に〔賢〕字の出例状況(資料9)をみると、正文では17巻中11巻と7割近くに広く薄く出例する。平均0.09%である。上位3巻は「卜居」0.31%「惜誓」0.20%「七諫」0.30%である。注文になると、「漁父」篇に依然として出例が無い以外は全ての篇に出例があり、平均は0.39%、正文の約4倍強となる。上位3巻は「卜居」0.69%「惜誓」0.64%「九思」0.72%である。

検索字群：〔佞〕〔讒〕

己れ賢を求めて得ず。讒を疾み佞を惡む(「離騷」「倚閭闔而望予」注文)

「離騷」注文において、〔佞〕と〔讒〕は、結合して〔讒佞〕の形で用いられる例が〔佞〕〔讒〕双方において最も多く、〔讒佞〕で〔忠賢〕に対立する人間類型を表わすと考えられる。上に挙げた出例はこのことを裏付ける。

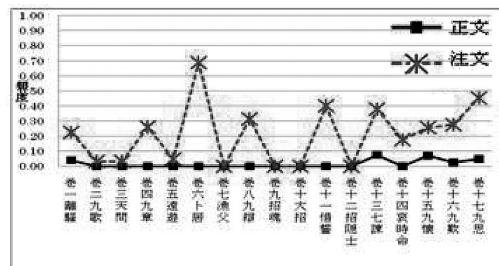
屈賦においても、〔佞〕〔讒〕双方において〔讒佞〕という一語での出例が最も多い。「九章・惜往日」「使讒諛而日得」の注文は「佞人、位は高く、家は富饒也」と正文中の〔讒〕を〔佞〕で解いており、〔佞〕〔讒〕の意味は基本的には同じと見ることが出来る。しかし、より詳細に見れば違いはあり、次の出例では、〔佞〕〔讒〕が一つの注の中で別々に説かれている。

雷は諸侯為り、以て君に興す。雲雨は冥昧たり、以て佞臣に興す。猿猴善く鳴く、以て讒人に興す。…雷填填たるは君妄に怒る也。雨冥冥たるは羣佞聚まる也。猿啾啾たるは讒夫口を弄する也(「山鬼」「雷填填兮雨冥冥猿啾啾兮狢夜鳴風颯颯兮木蕭蕭」)

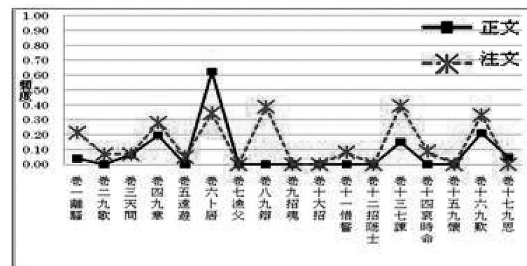
この出例が示すように、〔佞〕が正邪の邪の側をより広く指すのに対し、〔讒〕は讒言を行うことが核心にある。〔人〕や〔臣〕は、〔佞〕〔讒〕双方と結びついて熟語を形成するが、〔言〕と結びつくのは〔讒〕のみである。讒言の害への言及は当然多い。これが次節で見る「忠賢の受難」に繋がっていく。

〔忠佞〕は、屈賦・楚辭注文を通して、最も基本的な相対立する価値であって、葛藤の源泉である。そして、〔忠佞〕の対立は、「自ら忠誠を履行し、以て君に事ふるも、信用せられず、而して身は放逐せられ、以て危殆たるを傷む」(「九歌・東皇太一」「君欣欣兮樂康」注文)とあるように、やはり君の信任をめぐるのものであり、「讒佞に遭遇して、官爵を失ふ」(「九章・涉江」「哀吾生之無樂兮」注文)とあるのをみれば、その信任の先にあるのは「登用」、つまり〔位〕であることが分かる。

資料10 派生テーマ出例頻度：検索字〔佞〕



資料11 派生テーマ出例頻度：検索字〔讒〕



正文では、一部の篇を除いて殆ど出例は無いが、注文になると逆に一部を除いて殆ど全ての篇に出例がある。注文における〔佞〕〔讒〕2字平均出例頻度は正文の3倍以上である。

〔佞〕字の出例状況(資料10)をみると、正文では17巻中12巻と7割で出例がない。平均0.02%である。出例がある5篇は「離騷」「七諫」「九懐」「九歎」「九思」と漢賦が中心である。注文になると、依然として出例が無いのは「漁父」「招魂」「大招」「招隱士」4巻に減少する。上位3巻は「卜居」0.69%「惜誓」0.40%「九思」0.45%である。

〔讒〕字の出例状況(資料11)をみると、正文では17巻中10巻と約6割で出例がない。平均0.08%である。注文になると、依然として出例が無いのは6巻に減少する。出例がある11巻のうち上位3巻は「卜居」0.34%「九辯」0.39%「惜誓」0.40%である。

2) 忠賢の受難

楚國の人、忠信の行ひを尚ばず。其れ我が正直を嫉妬し、必ずや折挫して、之を敗毀せんと欲す(「離騷」
「恐嫉妬而折之」注文)

「忠佞の対立」において、加害行為は〔佞〕から〔忠〕に対してのみ行われる。ここから「忠賢の受難」が引き起こされる。前節で述べたように、〔佞〕が行う害として具体的に現れるのが讒言である。

君嘗て己れと期し、共に治を為さんと欲するも、後に讒言の故を以て、更めて我に告ぐるに間暇あらざるを以てし、遂に以て己れを疏遠す(「九歌・湘君」「期不信兮告余以不聞」注文)

衆口の論ずる所、萬人の言ふ所、金性堅剛たるも、尚ほ為に銷鑠す、以て讒言多く君をして亂惑せしむるに喩ふ(「九章・惜誦」「故衆口其鑠金兮」注文)

讒言は君を「亂惑」させ、忠賢の「疏遠」をもたらす。

3) 不遇 検索字群：〔遇〕〔遭〕¹³⁾

己れ徳は高く智は明し、宜しく舜禹を輔けて以て太平を致し、九徳の歌・九韶の舞を奏すべし、而れども其の時に遇はず(「離騷」「聊假日以媮樂」注文)

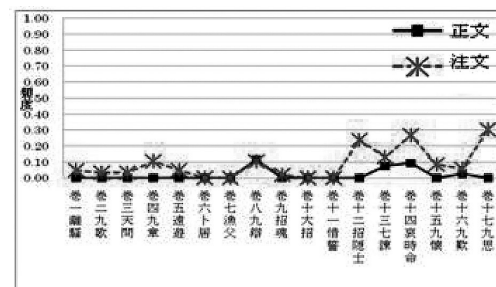
〔忠賢〕は〔忠賢〕であるがために難にあう運命にある。「不遇」一ふさわしい時、賢君の治世に「めぐり遇えない」ことへの嘆きが「離騷」テーマの通奏低音として流れている。「不遇」のテーマにおいては、往々にして理想は否定形で、現実には逆に肯定形で語られる。

「堯舜に遭値せざりて、闇君に遇ふ」(「湘夫人」)「明時に遇はずして、暗世に当たる」(「涉江」)「聖主に遭はず、而して亂世に遇ふ」(「思美人」)…理想と現実とは世と君の二つの面から捉えられ、現実には〔暗〕〔闇〕〔亂〕〔濁〕などの語で、理想の方は〔明〕〔聖〕などに加え、〔堯〕〔舜〕など具体的な〔聖主〕の名で表現される。次に挙げる例では、正文の「遭値君之不聰」に注して「懷王之闇くして聰明ならざるに遭値して、納れられず」と「不見納」が補われ、注者の関心が登用にあることが分かる。

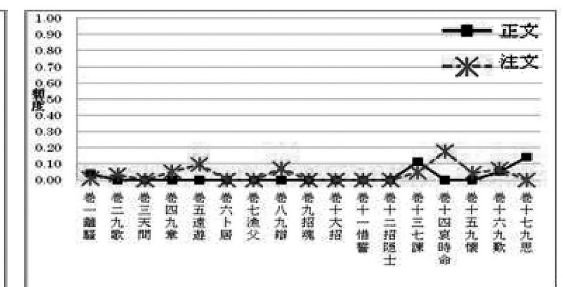
己れ忠を盡くし、其の聞く所を竭し、政事を陳列せんと欲するも、懷王之闇くして聰明ならざるに遭値して、納れられざる也(「七諫・沈江」「願悉心之所聞兮遭値君之不聰」注文)

賢君明君や盛世明時とのめぐり合わせは選択することも努力することも出来ない。以上に見たように、「不遇」は「生まれ合わせない」と言う概念であり、〔世〕〔時〕などと密接な関係を持ち、これらの語彙が不遇の叙述を導く。この点については、後に「清潔」の項で述べる。

資料12 派生テーマ出例頻度：検索字〔遇〕



資料13 派生テーマ出例頻度：検索字〔遭〕



正文では、一部の篇を除いて殆どの篇に出例が無いが、注文では一部の篇に依然として出例が無いのを除いて、その他の殆どの篇で〔遇〕〔遭〕両字が出例し、「不遇」テーマが展開する。しかし、主に漢賦に於いてである。

具体的に〔遇〕字の出例状況(資料12)をみると、正文では17巻中13巻と8割で出例がない。平均0.02%である。出例がある4篇は「九辯」「七諫」「哀時命」「九歎」と漢賦が中心である。注文では、依然として出例が無いのは「卜居」「漁父」「大招」「惜誓」4巻に減少する。上位3巻は「招隱士」0.24%「哀時命」0.27%「九思」0.30%である。

具体的に〔遭〕字の出例状況(資料13)をみると、正文では〔遇〕と全く同様に、17巻中13巻と8割で出例がない。平均0.02%である。出例がある4篇は「離騷」「七諫」「九歎」「九思」と漢賦が中心である。注文では、依然として出例が無いのは7巻に減少する。平均出例頻度は0.04%で、

正文の2倍である。上位3巻は「遠遊」0.10%「九辯」0.07%「哀時命」0.18%である。

4) 孤高 検索字群：〔衆〕〔獨〕

衆人皆な賚・糝・糝・糝¹⁴を佩び、讒佞の行ひを為し、朝廷に満ちて、富貴を獲。汝は獨り蘭蕙を服し、忠直を守りて、判然として離別し、衆と同じからず。故に斥棄せらるる也(「離騷」「判獨離而不服」注文)

「忠佞の対立」の展開の中では、〔不同〕〔不合〕〔異〕などの一連の概念が重要な働きをしており、否定形で〔不與衆同〕(衆と同じからず)〔不與衆合〕(衆と合はず)、或いは肯定形で〔與衆異〕(衆と異なる)などの表現が繰り返されて、〔衆〕という存在がクローズアップされる。〔衆…獨…〕の構文を持つ出例を見ていくと、〔衆〕と〔獨〕は、明らかに正邪の価値と対応しており、双方の属性を見ると「忠佞の対立」そのものである。しかし、〔忠佞〕が正邪の対立であるのに対し、〔衆〕と〔獨〕は多寡の関係にある。〔獨〕ただしいために、孤立をかち、排斥を招く。これが「衆と同じからず」が「受難」を引き起こす所以である。上に挙げた出例は、このテーマを集約した典型例といえる。

次に挙げる「惜誦」の出例では、正文の〔衆人〕が〔在位之臣〕と注される。やはり「登用」をめぐる葛藤が対立の源泉であることが分かる。

在位の臣、私を營みて家の為めにす。己れ獨り君を先んじ身を後にす。其の義相ひ反す。故に衆人の仇怨する所と為る(「九章・惜誦」「羌衆人之所仇」注文)

次の出例のように、群れる〔衆〕は〔俗〕と同義に説かれる。

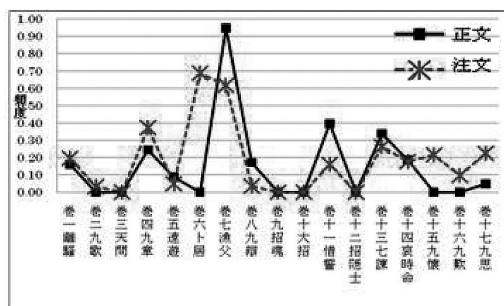
俗人羣聚して賢智を毀るは、亦た其の行度の異なりたるを以て、故に羣れて誘る。

徳高き者は衆に合はず、行ひ異なる者は俗に合はず、故に犬の吠ゆる所、衆人の誦る所と為る

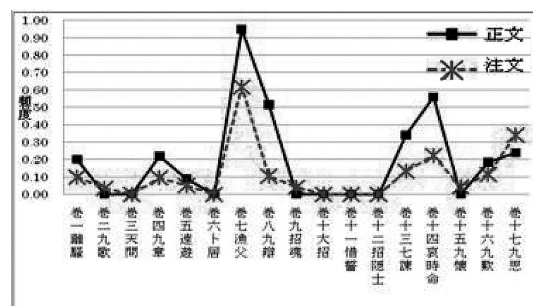
(「九章」「懷沙」「邑犬羣吠兮吠所怪也」「固庸態也」注文)

群れる〔衆〕に対し、孤立する〔獨〕。その状況を支える矜持が「孤高」のテーマを形成し、次に見る〔清潔〕のテーマを導く。

資料14 派生テーマ出例頻度：検索字〔衆〕



資料15 派生テーマ出例頻度：検索字〔獨〕



正文においても半数の巻に〔衆〕〔獨〕の出例がある。正文としては〔忠〕〔賢〕に次いで多い。

一方、注文に正文より出例頻度が低い篇がある。これはその他の「離騷」テーマではみられない現象である。しかし、グラフが示すように、正文と注文の間には明らかな関連がある。

〔衆〕字の出例状況(資料14)をみると、正文では17巻中9巻に出例があり、無いのは8巻で、約半々であるが、平均は0.15%と正文としてはかなり高い出例頻度である。原因は「漁父」篇の頻度が0.95%と異常に高いことである。注文では、依然として出例が無いのは「天問」「招魂」「大招」「招隱士」4巻に減少、平均0.18%で、正文とほぼ同じである。上位3巻は「九章」0.37%「卜居」0.69%「漁父」0.62%で、みな屈賦である。

〔獨〕字の出例状況(資料15)をみると、正文では〔衆〕とよく似ており、17巻中9巻に出例があり、無いのは8巻で半々であるが、出例頻度平均は0.19%と正文では最も高い。これは出例が有る篇では、例えば上位3巻は「漁父」0.95%「九辯」0.51%「哀時命」0.56%と出例頻度が非常に高いためである。注文では、平均出例頻度は0.11%、上位3巻は「漁父」0.62%「哀時命」0.22%「九思」0.34%である。

5) 清潔 検索字群：〔清〕〔潔〕

己れ清潔を飲食して、誠に我が形貌をして、信にして美好、中心をして、簡練にして道要に合はしめんと欲す…何者、衆人苟も財利に飽かんと欲し、己れ獨り仁義に飽かんと欲する也(「離騷」「長顛顛亦何傷」注文)

「離騷」「後序」には王逸が抱いていた屈原イメージが具体的に述べられている。「忠貞の質を膺き、清潔の性を體し、直きこと砥矢の若く、言は丹青の若し。進みて其の謀を隠さず、退きて其の命を顧みず。此れ誠に絶世の行ひ、俊彦の英なり」。この評価には、屈原の人格であると信じられた価値への強い共感と賛美が現れている。「離騷」注文に見られる「清潔」のテーマはこのような屈原像から生じたものだろう。

「清潔」テーマの展開を追ってみると、香草や玉石などを食したり身に帯びることを、身を「清潔」にするものと解し、そのような外在の「清潔」で、徳や節操といった内在の「清潔」を象徴させている。「清潔」の出例を見ていくと、「清潔」は「孤高」のテーマの〔獨〕の側、つまり〔忠賢〕の属性であることが分かる。とすれば、「清潔」であることは、〔忠賢〕であることそのものであり、ここまでみて来た「対立」「受難」「不遇」「孤高」を背景に、「敗者」である〔忠賢〕に矜持を与えるものであることが窺える。このように、「登用」がメインテーマであるとする、「清潔」のテーマは諸テーマをひたす全体の基調を形成している。

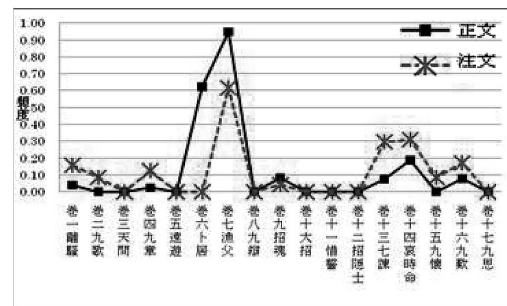
屈賦では巻二が目を引く。巻二正文に〔清〕〔潔〕の出例は1件もないが、正文中の沐浴したり、香草や玉石を身に佩ぶる神々の行為に王注は〔清〕〔潔〕の価値を与える。それらの多くは政治倫理上の「清潔」の意味を明確に持つに至っていないが、「きよめる」「美しくする」手段は「離騷」テーマと同じであり、内面の浄化に繋がる方向での好ましさを言うことから、次の出例のような、屈原の政治倫理上の「清潔」と結びつける読み方と地続きと思われる。

…清潔の士、屈原が若き者を謂ふ也。…山鬼は衆香を修飾し、以て其の善を崇ぶ。屈原は清潔を履行し、以て其の身を厲む。神人好を同にす、故に香馨を折りて相ひ遺り、以て其の志を同うす（「九歌」「山鬼」「折芳馨兮遺所思」注文）

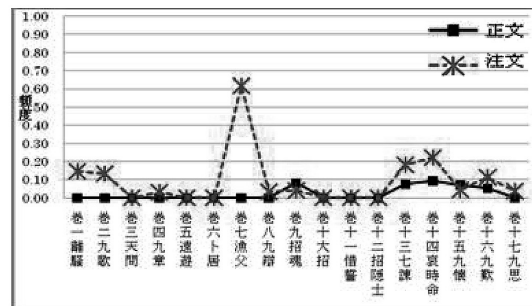
次の出例は完璧な清潔イメージである。「姿質茂盛」とは内外両面の美が備わっていることを指す。

已れ先人美烈の、情性は純厚、志意は潔白、身は瑕穢なく、姿質は茂盛、行ひは過失なきを受く（「九歎・愍命」「情純潔而罔蕪兮・盛質而無愆」注文）

資料16 派生テーマ出例頻度：検索字〔清〕



資料17 派生テーマ出例頻度：検索字〔潔〕



全体としては、正文注文ともに出例頻度は高くない。「漁父」「卜居」の2篇が突出している他は漢賦を中心に出例する。

〔清〕字の出例状況（資料16）をみると、正文では17巻中8巻に出例が有り、無いのは9巻でおよそ半々、平均は0.12%である。注文になると、9巻に出例が有り、無いのは8巻で、状況は正文と似ている。平均出例頻度は0.11%である。「九歌」は正文に出例が無いが、注文で出例がある。上位3巻は「漁父」0.62%「七諫」0.30%「哀時命」0.31%である。

〔潔〕字の出例状況（資料17）をみると、正文では17巻中12巻と7割近くに於いて出例が無い。平均頻度は0.02%である。出例があるのは「招魂」「七諫」「哀時命」「九懷」「九歎」の5篇で、漢賦が中心である。注文になると、依然として出例が無いのは6巻に減少し、平均頻度は0.09%である。上位3巻は「漁父」0.62%「哀時命」0.22%「七諫」0.18%である。

むすびに

本稿は屈原イメージの祖型を把握するために、王逸『楚辭章句』において上記の検索字群を検索する方法で研究を行った。その結果、「登用」がメインテーマとして浮上した。メインテーマは5つのサブテーマ「よき登用・あしき登用」「臣としての賢人」「在位」「敗者としての賢人」「去」からなる。メインテーマからは、また幾つかの派生テーマが生じている。本稿では、主要な5テーマ

「忠佞の対立」「忠賢の受難」「不遇」「孤高」「清潔」を採りあげて考察した。

『楚辭章句』における「離騷」テーマの展開をみると、正文と注文の間には明らかな差があり、「離騷」テーマは主に注文中で展開している。しかし、同時に正文と注文の間には明らかに関連もみられ、注者が「離騷」テーマを展開するには正文の制約を受けたことが分かる。

『楚辭章句』における「離騷」テーマの展開は、屈賦では「九章」が中心である。「九章」においては、正文中においても「離騷」テーマ検索字群が出例し、注文においては「離騷」テーマはより明らかであった。「卜居」や「漁父」のような短編は屈原イメージのある一面を突出させた形になっているが、特に「漁父」はまるで「孤高」と「清潔」テーマを凝縮させたかのような一篇である。このような象徴性の高い短編は屈原イメージのある一面を突出して表現し、後世の屈原イメージに強い影響を与えたと思われる。その他の諸篇においては、「七諫」が正文・注文ともに中心となり、「九辯」「惜誓」「哀時命」「九懷」「九歎」がそれに次いでいる。これらの篇は戦国末から漢代にかけての屈賦についての理解と（それに基づいた）屈原イメージを反映したものと思われる。

中国文化史における変遷の中の系譜性、中でも意識やイメージという数値化しがたい抽象的な対象を考察するために、本研究は漢文化の最も重要な媒体である“漢字”を切り口にキーワードを電子文献で検索するという手法を試みている。この試みを通して、この手法に存在する技術的問題も明らかになった。例えば、字体や書体の異同による検索漏れ、版本による字句の異同、注文における既述部分の省略などが引き起こす検索結果への影響である。出例数や頻度は一定の指標に過ぎない。今後は、この手法の課題も念頭に置きつつ、王逸『楚辭章句』漢代以降の屈原イメージの継承を辿っていきたい。

参考文献：

- ① 黄靈庚編著『楚辭章句疏証』（全5冊）中華書局、2007年
- ② 崔富章・石川三佐男「西村時彦対楚辞学的貢献—兼述中国人心目中的屈原形象—」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第25号、2003年
- ③ 小南一郎『楚辞とその注釈者たち』朋友書店、2003年
- ④ 「屈原像の中国文化史上の役割：漢代における祖型の登場」『宮崎公立大学人文学部紀要2000』第8巻、第1号、2001年3月
- ⑤ 「悲憤慷慨の系譜—王逸注「離騷」にみる漢代屈原像」愛知大学現代中国学会『中国21』第15号、2003年3月
- ⑥ 「テキストとしての王逸『楚辭章句』—その問題点—」『宮崎公立大学人文学部紀要2005』2006年3月

- ¹ 王逸『楚辭章句』に戦国の宋玉・景差ら、漢の賈誼・劉向らの賦を収めることが示すように、屈原の後にその辞に習って創作された賦を総称して「楚辭」と呼ぶ。このため、屈原による創作とみなされた賦は区別のために「屈賦」（或いは「屈原賦」）と呼ぶことがある。しかし、いずれの賦を「屈賦」と認めるかについては諸説ある。このため、小稿では王逸『楚辭章句』序文に拠って、屈原作と“みなされた”賦という意味で「屈賦」を使用する。
- ² 王逸については、『後漢書』『文苑傳』に「元初中、擧上計吏爲校書郎。…著楚辭章句行於世」とあり、元初年間に校書郎の職にあったことが知られている。現行本『楚辭章句』には各巻頭に「校書郎臣王逸上」の題辞がある版があることから、『章句』は王逸が校書郎の任にあった元初年間に撰したものと考えられている。
- ³ 巻十「大招」については、『楚辭章句』序文に「或曰景差、疑不能明也」ともあり、屈原をめぐる言説の中でも言及されることが少ない。このため、ここでは屈賦以外のその他の諸篇のグループの中に置く。
- ⁴ この問題については、主に参考文献②を参照した。
- ⁵ 王逸『楚辭章句』現行本には班固の「序」「賛序」が収められている（巻一「離騷經章句」末と巻三「天問章句」末の二つの版本あり）。当初からの形であるかどうかは不明。もともと班固の『離騷經章句』に付されたものと考えられている。そのうち「序」に「淮南王安叙離騷傳」とある。
- ⁶ 洪興祖『楚辭補注』では「一本九歌至九思下皆有傳字」とある。
- ⁷ 浅野通有「『楚辭章句』における九辯の編次」『國學院雜誌』第71巻第7号、1970年。宮野直也「王逸『楚辭章句』の注釈態度について」日本中国学会報、第39集、1987年など
- ⁸ 検索に当たっては、『文淵閣四庫全書電子版』（上海人民出版社、迪志文化出版有限公司）を使用した。
- ⁹ 「九章・涉江」「雲霏霏而承宇」注文「日以喻君、山以喻臣」、「九章・思美人」「車既覆而馬顛兮」注文「車以喻君、馬以喻臣」など。
- ¹⁰ 一方、君臣関係への言及の中には、先秦期の君臣関係に通じるような、君臣関係を選択的互惠的に説くものも僅かながら依然見られることも指摘しておかなければならない。一例を挙げておく。「君不能以禮敬聘請賢者、猶以直鍼釣魚無所能得也」(「七諫・謬諫」)、「君不曉忠信、亦不可爲竭謀盡誠也」(「九歎・思古」)、「須明君禮敬己、然後仕」(「九歎・憂苦」) など。
- ¹¹ 『四庫全書』版では「忘造」となっているが、前掲注①文献に拠り「妄造」に改める。
- ¹² 「九懷・靈懷」「不顧身之卑賤兮惜皇興之不興」注文「言己遠行千里、不敢顧念身之貧賤、欲慕高位也、惜君國失賢、道德不得盛也」
- ¹³ 参考文献⑤における作業では、「不遇」テーマは〔遇〕〔當〕〔世〕〔時〕で検索を行ったが、検索結果に鑑み、本稿の作業においては、〔當〕〔世〕〔時〕を除外し、新たに〔遭〕を加えた。
- ¹⁴ 『四庫全書』版では「臬已」となっているが、参考文献①に拠り「臬耳」に改める。